

特集 基礎学力を問い直す

楽しく学ぶ意欲が 基礎学力をつくる

津田雅子

(東京都練馬区立開進第二中学校)

1. はじめに

最近、授業が楽しい。生徒が真剣に取り組んでいる姿を実感できるからである。先日実施した speaking test において ALT の先生が「すばらしい態度で、よく話す」と絶賛してくださった。手前味噌ではあるが、昨年度の2年生は speaking test やその他の場面において、楽しくコミュニケーション活動に参加し、積極的な学習態度を示していた。そしてそうした状況が生まれているのは、多くの生徒が英語の基礎学力を身に付け、学習することへの関心や意欲、態度が育っているからだろうと考えている。

2. 基礎学力って何だろう

さて、基礎学力とは何なのだろうか。佐藤学氏によれば、現在日本で主張されているのは「basic skills の徹底」ということになる。本来は、literacy (必要最低限度の共通教養) というのが海外でのとらえ方のようなのであるが、ここでは、日本で考えられている「basic skills の徹底」について考えていきたい。

この basic skills を英語という教科の中でどうとらえるか？ まずこのことを明確にする必要がある。英語におけるスキルとは、聞く力、話す力、読む力、書く力、この4つの技能に関わる能力であるのは当然のことである。しかし、こうした4つのスキルにおける基礎学力のどこまでを基礎として定義することができるだろうか。学年段階によってもその内容は異なるであろうし、なかなか難しい。

そこで、ここでは具体的に「話す力」における basic skills について考えてみたい。1年次の学習を終えた2年生のスタート段階では、「自分の気持ちや身の回りのできごとなどの中から簡単な表現を用

いてコミュニケーションを図」ることが必要であるが、少なくとも自分の名前、出身地、誕生日、年齢、住んでいる場所など、自分に関する最低限の事柄が表現できるようになってほしいものである。

Hello. My name is Uchida Ken. I am from Tokyo. I am 14 years old. My birthday is October 4th. I live in Nerima. I like music...

上記のような文章を口頭で言うことができれば2年生スタートの段階では、「話すこと」の基礎能力はありと判断してもよい。その中に多少間違いがあったとしても聞き手が全体として意味を理解できる程度のものであれば特に問題はない。また、間違いがあった場合、それについて聞き手が再度確認したりして、それに対して応答できれば十分に基礎学力は備わっていると判断してよい。

3. 基礎学力をいかにして保証していくか

(1) コミュニケーションへの関心を喚起させる

昨年度の2年生の授業の中でいつも心がけてきたのは、彼らが活動する場面を数多く創り出すことであった。英語のシャワーを浴びせることも必要であるが、学習した英語を使ってみるチャンスを多く与えるということが大切である。

1年次においてはあまり複雑な言語活動ではないが、information gap を取り入れた interview game を中心に、とにかく多くの時間を与えて彼らに活動をさせてきた。座席を離れ、自由に教室を歩きながら、友だちと出会い、“No Japanese, only English!” の注意を受ける中で、あいさつを交わし、相手にインタビューをする。そして、相手から答えを聞き取り、また、次の友だちに出会っていく。単純な活動ではあるが、日本語を介さないで英語を使う場面

多く持つことは、話すという活動に臆病にならずに英語に慣れる機会を作ることになった。また、毎回、ワークシートを自分で作るとなると大変だが、教科書会社から出ている activity 集を活用するなどしてあまり負担のかからない形で実践すれば、継続的に実践できる。生徒たちは与えられた時間の中で、英語を話し、コミュニケーションすることの楽しさを十分獲得することができたように思う。そしてそのことが話すという技能の basic skills 獲得へとつながってきている。全てのスキルを獲得する上で最も基本的なスキルは何か、それは生徒自らが楽しく積極的に学習する態度を身に付けることである。それ自体が生徒のそれぞれのスキルにおける基礎学力を獲得することにつながると考える。

(2) ボトム・アップとトップ・ダウンの併用

basic skills を獲得させる上で具体的な指導の方法について考えておきたい。bottom up 方式, top down 方式の併用である。bottom up ではダメ, top down が全てというような話も聞いたこともあるが、基礎学力を育成していくにはこの両方の併用が必要だと思う。例えば、単語力。私は、単語を多く知っているということが英語の基礎学力の根底をなすと考えているが、文法を十分理解していない場合も、単語をつないでいくことでどうにか伝えたいことを相手に知らせることができる。そんなわけで生徒には単語力を大いに付けさせたいと思い、いろいろな方法による単語の覚え方を生徒に紹介している。まずは目を使って、文字のつながりを視覚的に把握する作業、音声を通して覚える方法、手を使って書きながら覚える方法、そして文章の中でその語がいかに使われているか予習ノートの中で確認していく作業などである。生徒は事前に予習ノートで単語の意味を辞書で調べ確認しているが、授業の中で音声を学びながら、また、同じような意味を持つ語や反意語などとともに、学習していく場面があったり、全くそうした事前の準備のない状況で reading 教材を通して、推測しながら新出単語と出会い、本来の意味を確認する場面があったりする。佐藤学氏は「基礎的な知識や技能であればあるほど、反復練習のドリルによる習得でなく、経験を通して機能的に習得される」と述べているが、1つの方法ではう

まく力は付いていかない。反復練習とともに、単語を使用して自己表現するチャンスを数多く与えていく中で生徒は単語を獲得していく。

(3) 目標設定は高めに

教師は指導において、生徒の到達目標を意識して指導しなければならない。その際に目標を高めに置く必要がある。生徒の能力をみると slow learners は学習過程で難しい状況をたくさん抱えている。「この生徒には多くを望めない…」と考えてしまっただけはその生徒の基礎学力を付ける機会を失ってしまう。決して甘めの目標を設定せず、生徒にここまでやり遂げてほしいと教師側が常に思っていれば生徒はその下の段階をクリアして、その目標を達成すべく努力するものだと思う。どの生徒も自分の力をどうにかして付けていきたいという気持ちを持っていることを最近とみに感じている。

(4) どの領域も必要であるという認識

教師側に自分の得意、不得意分野があり、あまり得意でなかったり、面倒な指導になるとその分野の指導を避ける傾向がある。また、実践的コミュニケーション能力の育成のみの授業を行っているかどうか。私は1年次においては listening, speaking を中心には置いているが、reading, writing についても教科書の中からポイント的な箇所を取り上げ、指導している。特に writing においてはまとまりのある文章を書かせることが大変大切である。前にも述べたがとにかく生徒たちに活動する機会を多く与えていくことで、生徒は経験を通して基礎学力を獲得していくものである。4技能を統合的に指導していきたいものだ。

4. おわりに

基礎学力を生徒にどう保証していくか、これはこれまででも、また現在においても教師にとって大変重要なテーマであり続けてきた。生徒が自ら学ぼう、力を付けようとしているとき、生徒は着実に力を付けている。その学ぼうという意欲、態度を私たち教師が育成すること、そのことがまさしく基礎学力を保証していくことにつながるのだろう。

(参考文献：佐藤 学『学力を問い直す』岩波ブックレット、2001年)